

平成29年1月10日(火)

老球の細道296号

## 阿吽(あ、うん)の呼吸

会津バスケットボール協会 室井 富仁

世の歴史家は「クレオパトラの鼻があと何センチ低かったら世界の歴史は変わっただろう」とのたまう。それとはレベルが格段に低くなるが「身長があと10センチ高かったら私のバスケット人生は変わっただろう」なんていうことを現役選手だった若かりし頃、毎日のように考え、親を恨んだものである。

私は身長も人間的器も小さいがゆえに大きなものに憧れる。桁外れのスケールを羨望する。旅行であちこち観光する時のポイントはスケールの大きなものと美しいものである。修学旅行で関西に行くと定番コースの一つに奈良東大寺がある。その建築物は大仏をはじめとしてスケールの大きなものが数多くある。その中でも南大門の金剛力士像は凄い。

この像は鎌倉時代に運慶、快慶などによって作られた。高さ8・4メートルに達する巨大な木造であり、阿形(あぎょう)と吽形(うんぎょう)の言われる2体の金剛力士像が向かい合っている。口が開いている方を「阿形(あぎょう)」、閉じている方を「吽形(うんぎょう)」と呼ばれている。「阿吽(あうん)」とは仏教の呪文の一つ。阿は口を開いて最初に出す音、吽は口を閉じて出す最後の音であり、そこから転じて、二人の人物が呼吸まで合わせるように共に行動しているさまを「阿吽の呼吸」などと呼ぶ。

バスケットボールにおいても見事なコンビプレーをしたり、黙っていてもお互いに気持ちを察してプレーしあう時に使われる。私のバスケットプレイヤー人生においても3人の「阿吽の仲間」が存在した。

一人は、高校時代のチームメートであった鈴木敏典氏。チームのキャプテンでありセンターであった。センターといっても177センチしかない。しかし、抜群のパワーと反射神経を備え、当時の福島県ではNO1リバウンダーであり、ゴール下では絶対的な強さを誇っていた。私がドライブすれば必ず合わせてくれたのでタイミングの良いアシストパスをすることができた。ひとえに阿吽の呼吸が成しえた技であり、彼が私に合わせてくれたたまものである。また、チームの得点が止まるといつも私に言う。「室井打て！俺がリバウンドをとるから」。そんなことを言われたらシュートは入らないはずがない。

二人目は、ミニバス界では知る人ぞ知るスキンヘッドの坂下ミニバスコーチ鈴木新氏(会社役員)である。彼は「会津クラブ」チーム創設時のチームメートである。当時は大会2ヶ月前からは基本的に毎日練習し、平日は夜8時から10時まで練習をしていた。練習を毎回始めから終わりまで参加できたのは私と鈴木氏くらいであった。1:1の練習で始まり1:1で終わったこともあった。毎日の練習が鈴木氏との阿吽の呼吸。そして福島県クラブチームで初めて東北大会を制覇した。

最後は、教員チームでプレーした古川晃氏(現中学校校長)である。彼は同じガードポジションであったがボール運びを専門的に受け持った。「室井さんはシュートを打って！」が口癖であった。私がシュートを打ちたい思う時は必ずナイスパスをアシストしてくれた。

阿吽の呼吸でプレーしたり、練習、試合をしたりすることができた仲間がいたおかげであの頃の私があり現在がある。一人ではたいしたことはできなかった。蛇足になるが、「阿吽」のプレイは、「コミュニケーション」と「アイコンタクト」が前提になる。